

# ルビオは西洋植民地主義への回帰を宣言、欧州はそれに拍手を送った

ジョナサン・クック

Middle East Eye 2026年2月19日

[Rubio declared a return to brutal western colonialism - and Europe applauded | Middle East Eye](#)

画像提供:Gage Skidmore/Wikimediacommons、

## 西洋植民地主義を復活させると宣言

2月14日のミュンヘン安全保障会議でのマルコ・ルビオ国務長官の演説は、トランプ政権によるもう一つの不穏な意図表明だった。

ルビオによれば、アメリカの外交政策の明確な目標は、第二次世界大戦まで約5世紀にわたり続いた西洋の植民地秩序を復活させることであるというのだ。

白人が他の国を支配するのが当然”という古い植民地主義の考え方が、何の反省もなくまた戻ってきた。

ルビオの馬鹿げた再話では、ヨーロッパによる地球の多くの植民地化と資源の略奪は、西洋の探検、革新、創造性の栄光ある時代だった。西洋は世界秩序を維持しつつ、後発の人々に「優れた」文明をもたらした。

1945年以前の時代を振り返り、彼はこう述べている。「西洋は拡大していた宣教師、巡礼者、兵士、探検家たちが海を越え、新たな大陸を開拓し、世界中に広がる巨大な帝国を築き上げていた」。

しかし、その流れは80年前に逆転した。「偉大な西洋帝国は終焉の衰退期に突入していた。無神論的な共産主義革命と反植民地蜂起がこれを加速させた。彼らは世界を変革し、やがて広大な地域に赤い鎌と槌の旗を翻そうとしていた。

## 国連と国際法で西欧が衰退した

ルビオによれば、その衰退を加速させたのは、戦争直後に国連が確立した「国際法という抽象的概念」と彼が一蹴したものだ。彼が嘲笑的に「完璧な世界」と呼んだものを追求する中で、これらの新しい普遍法則　すべての人間を平等と扱うものは、西洋の植民地主義を足止めするだけだった。

ルビオは、国際法の目的が第二次世界大戦の恐怖、つまり死の収容所での民間人の絶滅やヨーロッパや日本の都市への焼夷弾攻撃の再発を防ぐことにあることにはあえて言及しなかった。

演説の中で、ルビオはヨーロッパに対し、トランプ政権と共に「西洋の支配時代」を復活させ、「人類史上最大の文明を再生する」ようよびかけた。

「私たちが望むのは同盟の活性化であり、社会を蝕んでいるのは単なる悪政ではなく、絶望と慢心の病態であることを認識することです。「同盟　私たちが望む同盟とは、気候変動や戦争、技術への恐怖によって無行動に麻痺しないものである」と彼は語った。

## 平和も秩序もない

驚くべきことに、ルビオは国家元首、政治家、外交官、軍関係者からなる聴衆から、演説の間ずっと熱狂的な拍手で迎えられた。彼は出席者の半数からスタンディングオベーションを受けたと伝えられている。

彼ら（出席者たち）は、「帝国は素晴らしいものだった」というルビオの勝ち誇った説明にすっかり飲み込まれてしまったようだ。しかしその説明は、「西洋による支配」の現実、とりわけ残虐な植民地支配や大規模な虐殺、そして先住民の大量奴隷化といった、しっかりと記録されている事実をまったく無視している。

これらは西洋帝国主義が過去に犯した不幸な出来事や過ちではなかった。それらは帝国にとっての必要不可欠なものだった。帝国が資金調達のために植民地化した人々の資産や労働力を強制的に奪う手段だった。

ルビオはまた、西洋の植民地主義がもたらした別の「負の側面」にも気づいていないようだった、それは5世紀を通じてあまりにも明白だった。グローバルサウスの資源を最初に略奪しようとするヨーロッパ諸国間の容赦ない競争は終わりのない戦争を招き、ヨーロッパ人も彼らも植民地化した人々も殺害されたのだ。

帝国は秩序も平和も保証しなかった。植民地主義は体系的な窃盗に関するものであり、ことわざにあるように、泥棒の間に名誉はほとんどない。国際法ができる前の「弱肉強食の世界」では、どの植民地大国もライバルに勝つために、自分たちの利益だけを追い求めていた。それが20世紀前半にヨーロッパを壊滅させた二度の恐ろしい戦争に至ったのだ。

ルビオは過去を理解していないため、未来像にも必然的に欠陥がある。もしトランプ政権が、西洋のあからさまな植民地支配を復活させようとするれば、自滅行為になるだろう。以下に見ていくように、そんな試みは私たち全員に破滅をもたらすからだ。実際、私たちはすでにその危険な道をかなり進んでしまっているのかもしれない。

## 帝国主義的な力

ルビオとトランプ政権の考え方には明らかな欠陥がいくつかある。

まず、ルビオの「西側は約 80 年前に植民地主義を放棄した」という主張は完全に誤りだ。第二次世界大戦の終結時、ヨーロッパは物理的打撃を受け経済的に疲弊し、植民地大国は、帝国のバトンをアメリカに渡した。ワシントンは植民地主義を終わらせたわけではなく、それを合理化し、効率化した。

ワシントンはヨーロッパの伝統であるナショナリスト指導者を打倒し、かわりに弱く従順な従属者を据えた。また、世界中に数百の米軍基地を配置し、軍事力を投射しつつ、新たなグローバル化技術を活用してソフトパワーを展開した。世界銀行や国際通貨基金(IMF)を通じた見えない経済的な餌とムチにより、非西側の指導者たちに命令への服従を促した。

ワシントンの自由な行動を主に制限したのは対立するソ連で、自国の傀儡国に武器を提供し補助金を出していた。冷戦はアメリカ帝国を相対的に抑えていた。それはルビオが主張するような「衰退」ではなく、まさに現実主義だった。核時代において、誤った一歩で世界的な壊滅に至る可能性のある対立を避けることだった。

ソ連崩壊以来の過去 30 年間、アメリカは帝国主義の力をますます攻撃的に行使してきた。旧ユーゴスラビア、イラク、アフガニスタン、再びイラク、リビア、シリア、そして今や究極の従属国家であるイスラエルの支援を受けて、石油資源豊富な中東、パレスチナ、レバノン、イランに広範囲に及ぶ。

第一期トランプ政権のずっと前から、ワシントンの超党派の外交政策の核心的目標は、主に旧ソ連諸国の植民地化をじわじわとすすめて、台湾をめぐる中国を脅かしながら、ロシアを封じ込めることにあった。

典型的なトランプ流のやり方で、ルビオは暗黙に認められていたことを明示した。アメリカは 1940 年代から帝國的な超大国であり続けてきたが、今世界で資源が減少しつつある中で、唯一の軍事超大国という立場を利用しながら、ますます対立的な姿勢を強めている。

ルビオは、アメリカの外交政策の数十年にわたる軌跡について、前任者たちよりも正直である。

## ホラーショー

「無神論的共産主義者」と神がかった後継者たちが、最終的に西洋帝国では抑えきれなかった「反植民地主義蜂起」を起こしたのには正当な理由がある。

西側の支配的な植民地エリートは、残忍な専制、虐殺、奴隷貿易を通じて何世紀にもわたりグローバルサウスの生活を恐るべき状況に追いやった。先住民は西側が押し付けた「秩序」からの解放を切望していたため、第二次世界大戦後、多くの人々がアメリカではなく共産主義ソ連に支援を求めたのだ。

西側の最後の入植者植民地の拠点である、1994年までのアパルトヘイト時代の南アフリカ、そして現在のアパルトヘイト時代のイスラエルでは、抑圧された者たちによる大規模な反乱が続いた。

南アフリカの白人少数支配のもとで暮らすことは、白人でない人にとっては危険で、心を押しつぶされるような体験だったし、イスラエルと占領下のパレスチナで、ユダヤ人が優位に立つ体制のもとでユダヤ人でない人が暮らすことと同じように、危険で心をすり減らすものだった。

また、これら両方のアパルトヘイト政権が世界的な連帯運動を生み出したことも注目に値する。

ほとんどの人々　たとえ西洋の人々でさえ　他の民族を抑圧し、その人間性や平等の権利を否定することが、不当で道徳に反する行為だと理解している。ワシントン（アメリカ政府）が植民地主義やアパルトヘイトを美化して見せたとしても、その事実が変わることはない。

歴史からの教訓は、トランプ政権による米国帝国主義の強化は、抵抗を激化させることになるということだ。過去 20 年間うたた寝していなかった人なら誰でも、それは明らかだ。

## ウクライナの恐喝

ロシアのウラジーミル・プーチン大統領は、2022年初頭にウクライナ侵攻の地政学的根拠を述べた際、西側で激しく非難された。例えばスロベニアの哲学者スラヴォイ・ジジェクは、プーチンが自分をピョートル大帝になぞらえ、ロシアの帝國的過去を復活させようとしていると非難した。

ジジェクはその証拠として、2022年6月、侵攻から数か月後にプーチン大統領がモスクワで若手起業家たちに向けて行った演説を引用した。プーチンはこう述べた。「どんな国でも、どんな民族でも、どんな人種でも、自らの主権を守らなければならない。なぜなら、中間の状態など存在しないからだ。国は主権国家であるか、植民地であるか、そのどちらかしかない。呼び名がどうであれ、それは変わらない」。

当時、プーチンの意図は明白だったはずだ。なぜなら、ワシントンの歴代政権が20年以上にわたり旧ソ連諸国をNATO(アメリカ帝国の軍事同盟)に取り込み、軍事基地をモスクワにますます近づけてきたからだ。

2008年にNATOが将来的にウクライナの同盟加盟を認めると約束したことは、ロシア指導部にとってはただ一つの意味でしか解釈できない。それは脅威としてだ。もし実現すれば、NATOの核弾頭はクレムリンまで数分の距離にある。

プーチンはロシアの主権を維持し、酔った前任者ボリス・エリツィン時代のようにアメリカ帝国の「中間」植民地になることを避けようと決意していた。ロシアの指導者は、資源、経済、防衛システムの鍵をワシントンに渡すというヨーロッパのモデルを拒否したのだ。

昨年トランプ氏がウクライナに対して行った「ゆすり」を、プーチンが得意げに見ていたことは間違いない。そのとき、ゼレンスキー大統領は、アメリカの保護と引き換えに、自国の鉱物資源を差し出すよう迫られた。これは、プーチンが主張する「この醜い権力政治の世界には“中間的な立場”など存在せず、主権国家であるか、より強い国の植民地であるかのどちらかだ」という考えを、まさに体現する出来事だった。

まさにその論理こそがロシアのウクライナ侵攻の決定を促した。当時は理解が難しかったのかもしれないが、ルビオの演説を考えれば今では理解しやすいはずだ。

ワシントンの帝国主義的野望を考えると、ウクライナはアメリカの地政学的軌道に入り込み、ロシアが先に隣国を自国の地政学的軌道に押し込めない限り、アメリカの戦争機械の植民地拠点となるだろう。

## ガザの新たな日常

トランプ政権は現実政治を明確にしている。ガザのジェノサイド的な抹消が新たな常態であり、ベネズエラのニコラス・マドゥロのような世界の指導者の誘拐も同様だ。

ヨーロッパ諸国はトランプの遠慮のない帝国主義と、それが自分たちに何を意味するのかについて不安を強めている。デンマークからグリーンランドを奪う脅威は警鐘となった。それがミュンヘン会議の議論を支配したと伝えられている。

4年前のプーチンの警告に沿って、ヨーロッパの指導者たちはアメリカによる不可逆的な植民地化を止めるために、主権をある程度取り戻す方法を必死に検討している。

ルビオはヨーロッパをアメリカとともに西洋帝国の復活に招き入れ、彼らをなだめようとした。その申し出は完全な欺瞞だった。

これは米欧の共同プロジェクトなどではない。トランプが関税を導入した際に、これは彼らをより強い隷属状態に追い込むための鞭として理解すべきだった。トランプがウクライナへの支持を見限ったとき、彼ら（ヨーロッパ）は「ロシア帝国主義」に対抗すると宣言していた。そしてグリーンランドの所有権を要求した時もそうだ。

## カーニー演説のまやかし

これらの「裏切り」に刺激されて、先月のダボス世界経済フォーラムでカナダのマーク・カーニー首相の演説となった。

そこで彼は、80年続いてきた「ルールに基づく国際秩序」は「心地よい作り話」にすぎず、実際にはアメリカの覇権から恩恵を受けるための口実にすぎないと警告した。その恩恵とは、「公共財、自由な航路、安定した金融システム、集団的安全保障、そして紛争解決の枠組みへの支援」などだ。

だからこそ、ワシントンの同盟国たちもこのごまかしに加担していたのだ。

「私たちは、『国際的なルールに基づく秩序』という話が部分的には虚構であることを知っていました。最も強い国は都合のいいときにはそのルールを免れることができ、貿易のルールも不公平に適用されていることを知っていました。そして、国際法がどれだけ厳格に適用されるかは、被告や被害者が誰かによって変わることも、私たちは知っていたのです。」

カーニーは、今こそ「嘘の中で生きるのをやめる時だ」と述べた。

多くの人々は、カナダの首相が、イギリスのキア・スターマーやフランスのエマニュエル・マクロンといったヨーロッパのテクノクラートの同盟者たちを代表して、アメリカによる海外での違法行為に対抗するために、透明性と誠実さへの新たな誓約を表明しているのだと考えた。しかし、それはまったくの誤解だった。カーニー、スターマー、マクロンがガザでのジェノサイドに引き続き加担し、トランプによるイランへの侵略戦争の脅しに沈黙していることが、その事実をはっきりと示している。

カーニーのダボス演説の目的はまったく別のものだった。トランプ自身の正直さ 国際法への公然たる軽蔑と旧来の帝国主義への熱意 は、アメリカの恩恵にあずかりそれに乗っている彼らの偽善を露呈させかねない。

彼らは自らのやり方を変えたわけではない。ただ、彼らがアメリカの植民地主義への加担を隠し、美化するために築いてきた「見せかけの外面（ファサード）」をトランプが壊してしまうのをやめてほしいだけなのだ。

ルビオはミュンヘンで再びその嘘を爆破した。彼が公然と「力こそ正義」帝国主義への回帰を宣言すると、会議は拍手に包まれた。

欧州委員会の技術官僚最高責任者ウルズラ・フォン・デア・ライエンは、ルビオの演説に「非常に安心した」と述べ、彼を「良き友人」と呼んだ。

## 核のアルマゲドン

ルビオ氏の発言の中で最も大きなごまかしは、第二次世界大戦後に西側諸国があからさまな植民地主義を放棄し、国連のような国際機関を設立した本当の理由を語らなかったことである。

それは、アメリカが敗北や衰退を受け入れたからではなく、むしろ戦後に超大国が急速に核兵器を開発したことで、権力の暴走を抑える仕組みがどうしても必要になったと認識したからなのだ

それは、無謀な植民地争いや対立が第三次世界大戦を引き起こし、やがて核による世界の破滅へと急速に発展してしまうのを防ぐ、唯一の希望だった。

過去 80 年間、何も変わっていない。

ロシアと中国は依然として大規模な核兵器を保有しており、モスクワはこれらの弾頭を前例のない速度で運ぶことができる極超音速ミサイルを保有している。

誤解が急速に相互攻撃に発展するのを防ぐための安全策はまだ存在しない。

人間の本質は 1940 年代から変わっていない　ひたすら傲慢になった超大国が、中国やロシアのような大国が自分を帝國的地位から追い落とすことを阻止しようと決意している。

核破壊の脅威は減少していません。むしろ、西側の消費や終わりのなき「経済成長」を維持するために必要な世界資源への制限が、米国に優れた価値観の守護者としての仮面を捨てようとするようますます強い圧力をかける中で、その脅威は指数関数的に増大しています。

ルビオはミュンヘン会議を通じて新たな現実を明らかにした。ワシントンはもはや口先だけで「いい人」でいたり、いかなる一線も守らないだろう。

アメリカは、帝国のトップとしての恒久的な地位に反対するものはすべて粉砕する決意を固めている。たとえその過程で、すべてと私たち全員を破壊することになっても。

**筆者のジョナサン・クックはイスラエル・パレスチナ紛争に関する3冊の著書を持つジャーナリスト。マーサ・ゲルホーン特別ジャーナリズム賞の受賞者。彼のウェブサイトとブログは [www.jonathan-cook.net](http://www.jonathan-cook.net) で閲覧できる。**

【翻訳チェック 田中靖宏】